

相原廃寺 III

1990年度中津地区遺跡群発掘調査概報(Ⅲ)
中津市文化財調査報告第10集

1991

中津市教育委員会

〈巻頭図版〉



調査区全景(西より)



相原廃寺出土軒丸瓦

はじめに

史上空前の好景気を背景とし、全国的に官民を問わず各種の開発行為が進行する中、その便利さとは裏腹に文化財保護の側に立つ者として、その状況変化の速さにはただただ驚くばかりである。

当中津市においても北大バイパス道路の一部開通や、民間企業の進出、また住宅建設の増加などここ2~3年の状況は風雲急を告げるものとなっている。こうした状況の中、当然開発行為に先立つ埋蔵文化財の調査は激増し、正に開発の為の調査に追われているのが実情です。

しかし、こうした状況は決して本来の文化財保護行政の在るべき姿ではなく、保存のための方策が求められていることも認識しなければなりません。中津市教育委員会ではこうした認識にたち1988年度より国および県費の補助を得て、市内に所在する重要遺跡を中心として確認調査を実施してまいりました。

相原庵寺は現在市内に所在する遺跡のうちで、最も重要なものの1つであります。遠く、白鳳の時代、この地で初めて大にそびえる壯麗な建物を有し、人々の注目を一心に集めたであろうその姿は想像するに難くありません。ところがその正確な位置づけは未だなされておらず、本調査事業はその実像に迫るものそして大きな期待を集めております。丁度3年次目を向え、調査事業も転換期を向える中、来年度は新たな展開を計画しており、今後とも皆様の御協力をお願い申し上げる次第です。

おわりに、調査にあたり御協力をいただいた地元の方々、および、御指導をいただいた調査指導委員の諸先生方、並びに県文化課はじめ関係各位に対し、衷心より感謝の意を表する次第です。

1991年3月31日

中津市教育委員会

教育長 武信元

例　　言

- ： 本書は中津市教育委員会が1990年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概要である。
 - 一、 調査は1990年度国宝重要文化財等保存整備事業費、及び1990年度大分県文化財保存事業費の補助をうけて実施した。
 - 二、 調査にあたっては地権者である恒住キサヨ氏、および耕作者の宮垣俊範氏、さらに地元相原地区の方々に多大な協力をいただいた。
 - 三、 調査期間中、調査指導委員の諸先生方の他、下記の方々より現地で有益な御指導、御助言をいただいた。
- 河原純文（文化庁記念物課主任調査官） 西谷 正（九州大学文学部教授） 石松好雄、高橋章、伊崎俊秋、飛野博文（福岡県教育庁文化課） 小倉正五（宇佐市教育委員会） 渡谷忠章
坂本嘉弘、高橋徹、村上久和、宮内克巳（大分県教育庁文化課） 吉田良介（中津市）
- 四、 調査団の構成は下記の通りである。

| | | | |
|--------|--------------------------------|---|-----------|
| 調査主体 | 中津市教育委員会 | | |
| 調査責任者 | 武信 元（中津市教育委員会教育長） | | |
| 調査指導委員 | 賀川光夫（別府大学教授） | | |
| | 澤村 仁（九州芸術工科大学教授） | | |
| | 小田富士雄（福岡大学教授） | | |
| | 後藤宗俊（別府大学教授） | | |
| | 甲斐忠彦（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長） | | |
| | 真野和夫（ | 〃 | 調査課長） |
| 調査員 | 清水宗昭（大分県教育庁管理部文化課埋蔵文化財第一係々長） | | |
| | 栗焼憲児（中津市教育委員会市民文化センター文化・会館係主任） | | |
| | 棚田昭仁（ | 〃 | 嘱託） |
| 事務局 | 宮崎俊幸（ | 〃 | 館長） |
| | 塙谷十起雄（ | 〃 | 文化・会館係々長） |
| | 田中布由彦（ | 〃 | 主任） |
| | 渡辺明美（ | 〃 | 臨時職員） |

- 五、 本書の執筆、編集は栗焼が行なった。現場図面の作成は一部栗焼の協力を得た。また遺物整理については中野温子、岩崎弘子、秋吉三和子（中津市文化財資料室）の協力をうけた。現場作業は以下の方々の協力による。

井上己徳、田原文子、高橋鈴子、中 和代、林 静江、日野ツルエ、徳永賀子、古島正子、黒川みゆき、黒川洋美、神崎文子、杉永文代、大久保四子

目 次

| | | |
|-----|----------|---|
| 第1章 | 地理と歴史的環境 | 1 |
| 第2章 | 調査の概要 | 3 |
| | 1. 調査の概要 | |
| | 2. 遺構 | |
| | 3. 資物 | |
| 第3章 | まとめ | 9 |

挿 図 目 次

| | | |
|-----|---------------------------------------|-------|
| 図 1 | 相原廃寺周辺主要遺跡分布図 | 2 |
| 図 2 | 相原廃寺周辺地形図 ($S = \frac{1}{300}$) | 4 ~ 5 |
| 図 3 | C地区出土 軒丸・軒平瓦実測図 ($S = \frac{1}{3}$) | 7 |
| 図 4 | C地区出土 丸瓦・平瓦実測図 ($S = \frac{1}{4}$) | 8 |

図 版 目 次

| | | |
|------|-------------------------------|----|
| 図版 1 | 1) C地区全景 調査前 (北側より) | 10 |
| | 2) C地区全景 調査状況 (西側より) | |
| 図版 2 | 1) C地区 第4 ~ 第7トレント調査状況 (西側より) | 11 |
| | 2) C地区 SD24、SD35発掘状況 (西側より) | |
| 図版 3 | 1) C地区 第4トレントSD25検出状況 (西側より) | 12 |
| | 2) C地区 第7トレント発掘状況 (西側より) | |
| 図版 4 | 1) C地区 第6トレントSD24軒丸瓦検出状況 | 13 |
| | 2) C地区 第6トレントSD35軒丸瓦検出状況 | |
| 図版 5 | C地区出土軒丸・軒平瓦 | 14 |
| 図版 6 | C地区出土軒平瓦・丸瓦・平瓦 | 15 |

第1章 地理と歴史的環境

大分県の北端、福岡県築上郡と県境で接する中津市は人口67,038人、市域5567km²を有する県北の中核都市である。

古く、中津市を含む周辺地域は「三毛評（みけのこおり）」と呼ばれ、山国川（御木川）を中心に乗せていました。その後「和名抄」には中津市域を含め豊前国下毛郡と記載されており、山国川を挟んだ上毛郡（現豊前市と築上郡東部）とは同じ豊前国に属し、社会的、経済的、地理的にも密接につながっていたと考えられる。

本地域の地形は英彦山に源を発する山国川と、その流域に広がる広大な冲積平野、さらには英彦山と八面山から延びる緩やかな開析扇状地によって代表される。特に中津市域では西側に沖代平野（沖積平野）、東側に下毛原丘陵（開析扇状地）が特徴的に展開し、遺跡の分布にも影響を与えていている。一般に遺跡が集中するのはこの下毛原丘陵であり、中津面と呼ばれる。この中津面に対比されるのが土佐井川沿いの丘陵地帯で、安曇面、垂水面と呼ばれる。こうした開析扇状地は沖積平野をとり囲むように分布しており、弥生時代～古墳時代に至る遺跡が点在する。

旧石器時代の遺跡については資料不足の感が否めない。そうした中でも近年の調査件数の増大により散在的ではあるが資料の出土が伝えられている。主として開析扇状地上での展開が認められ将来、こうした地域での発見が期待される。

縄文時代の代表的なものは棒垣遺跡である。棒垣遺跡は後期後半に属し、貝塚と集落がセットで確認された点に意義がある。さらに原井三ツ江遺跡^{注1}、土佐井遺跡^{注2}（大平村）、佐知遺跡^{注3}（三光村）などが近年新たに発見され、本地域でもかなり普遍的に縄文時代遺跡が展開する状況が認められてきた。これらの特徴は土佐井遺跡で早期を含めた資料が確認された他は全て後期後半であり、地理的にも全てが河川沿の段丘面に立地している。

弥生時代になると、遺跡の立地に若干の変化がみられる。一つは山国川沿に発達する自然堤防上であり、今一つは八面山から延びる高位の丘陵面である。前者では中桑野遺跡（新吉富村）、上万田遺跡などがあり、後者は森山遺跡で代表される。

古墳時代の演進としては近年集落の発見が相次いでいる。中須遺跡^{注4}、犬丸川流域遺跡第4地点^{注5}、安松遺跡^{注6}などは比較的大規模であり、佐知遺跡（三光村）では上ノ原横穴墓群との関連が指摘されている。また大平村を中心に埴輪等の調査も進んでおり、注目される。

以上、近年の成果を中心に列挙した。

注1 千田 幸「第一章第二節 地形」『大分県史（地誌編）』 大分県 1990

注2 小池史香「原井三ツ江遺跡」 大平村教育委員会 1989

注3 高橋 章他「土佐井地区遺跡」 大平村教育委員会 1990

注4 板本嘉弘「佐知遺跡」 大分県教育委員会 1989

注5 1990年度中津市教育委員会にて調査、現在整理中。

注6 注5と同じ

注7 注5と同じ

注8 福岡県教育委員会 飛野博文氏の御教示による。



1. 聖田小学校校庭遺跡 2. 高畠遺跡 3. 冲代小学校遺跡 4. 西永添遺跡 5. 永添中園遺跡
6. 規屋遺跡 7. 相原廢寺 8. 高瀬遺跡 9. 上万田遺跡 10. 三口遺跡 11. 板手前横穴
12. 常旗邸古墳 13. 上の原横穴 14. 鈴熊古墳 15. 榆生古墳 16. 天仲寺古墳
17. 垂水廢寺 18. 午頭天王遺跡 19. 中桑野遺跡 20. 穴ヶ葉山古墳 21. 穴ヶ葉山南古墳
22. 相原古墳

図1 相原廃城跡周辺主要遺跡分布図

第2章 調査の概要

1. 調査の概要

今年度の調査は前年度までの成果をふまえ、C地区を中心に行なった。前年度の調査では、C地区の周辺部分（C地区第1～第3トレンチ）で瓦剝（SK 05）や溝状遺構が存在することが明らかとなっていた。本年度はC地区水田中央部分を中心に遺構の確認を行なった。設定したトレンチは6本で、磁北方向を基準とした。まず第4・第5トレンチ（2×10m）を基本として設定した結果、トレンチ中央部付近を中心に溝状構造と多量の古瓦の分布がみられた。このため、中央部付近についてさらに第6トレンチ（4×8m）、第7トレンチ（3×16m）、第8トレンチ（5×8m）、第9トレンチ（1×8m）をそれぞれ設定して遺構の広がりの確認に努めた。その結果、C地区中央部では南北方向（ほぼ磁北）を基本とした溝状遺構が多く認められ、特に第6トレンチから第7トレンチにかけてはL字状に屈曲し、古瓦を多量に出土するSD 35が検出され、注目された。また、第4トレンチと第5トレンチ西端ではやはり南北に走る溝状遺構（SD 26）が検出され、前年度調査された第3トレンチSD 22、SX 06との関連上、興味が持たれた。

2 遺構

今回検出された遺構のほとんどは溝状遺構である。これらは大別するとほぼ東西方向に走る一群と、南北方向のものとに分けることができる。その規模はまちまちであるが概ね2mを越すものはない。深さも浅く、平均すると20cm程度である。これは地元で指摘されるようにC地区全体の地下げによる削平によるものと考えられ、調査区西側では水田床土下は直接地山層となっている。昨年度の調査結果とトータルでみた場合、調査区東側では略東西に幾条もの溝状遺構が走っており、西側では調査区中央部を中心に、磁北方向を基準とした溝状遺構が認められる。こうした溝状遺構はその含土の観察により少なくとも5種類に分けられるが、各々の特徴については現時点で明確に整理が出来ていないので言及しない。しかし、時期帯としては近世の所産と考えざるえない状況も指摘されており、今後詳しく整理してゆきたい。

今回確認された遺構のうち注目されたのは調査区中央付近で検出されたSD 35、SD 24と、西側で検出されたSD 26である。

SD 35は第7トレンチから第8トレンチにかけて検出された。最大巾2.1m、深さ0.25m程で、第6トレンチから第7トレンチにかけて西側へほぼ直角に屈曲し、さらに第8トレンチにかけて再び南側へ曲る。丁度鍵の手状を程し、多量の古瓦と礫を含む。第6トレンチから第9トレンチにかけてはやや大きめの礫が遺構に直交する状況で直線的に5条配置されており注目された。ただ、含土中に多量に含まれる古瓦等に若干の新しい遺物が含まれており、この状況と遺構の関係が問題となってくる。今後の整理作業の中で検討したい。

SD 24はSD 35に併行する状態で検出された。SD 35が第7トレンチより北側では確認できないのに対し、SD 24は第5トレンチから第4トレンチへ向けて連続的に確認された。ただし、第6トレンチでは0.4m程度であるのに対し、北側へ向うにしたがって巾広となり、第4トレンチでは最大で1.6mにもなる。また、第6トレンチでは全体に小石を敷き詰め、日々排水の状態がみられ

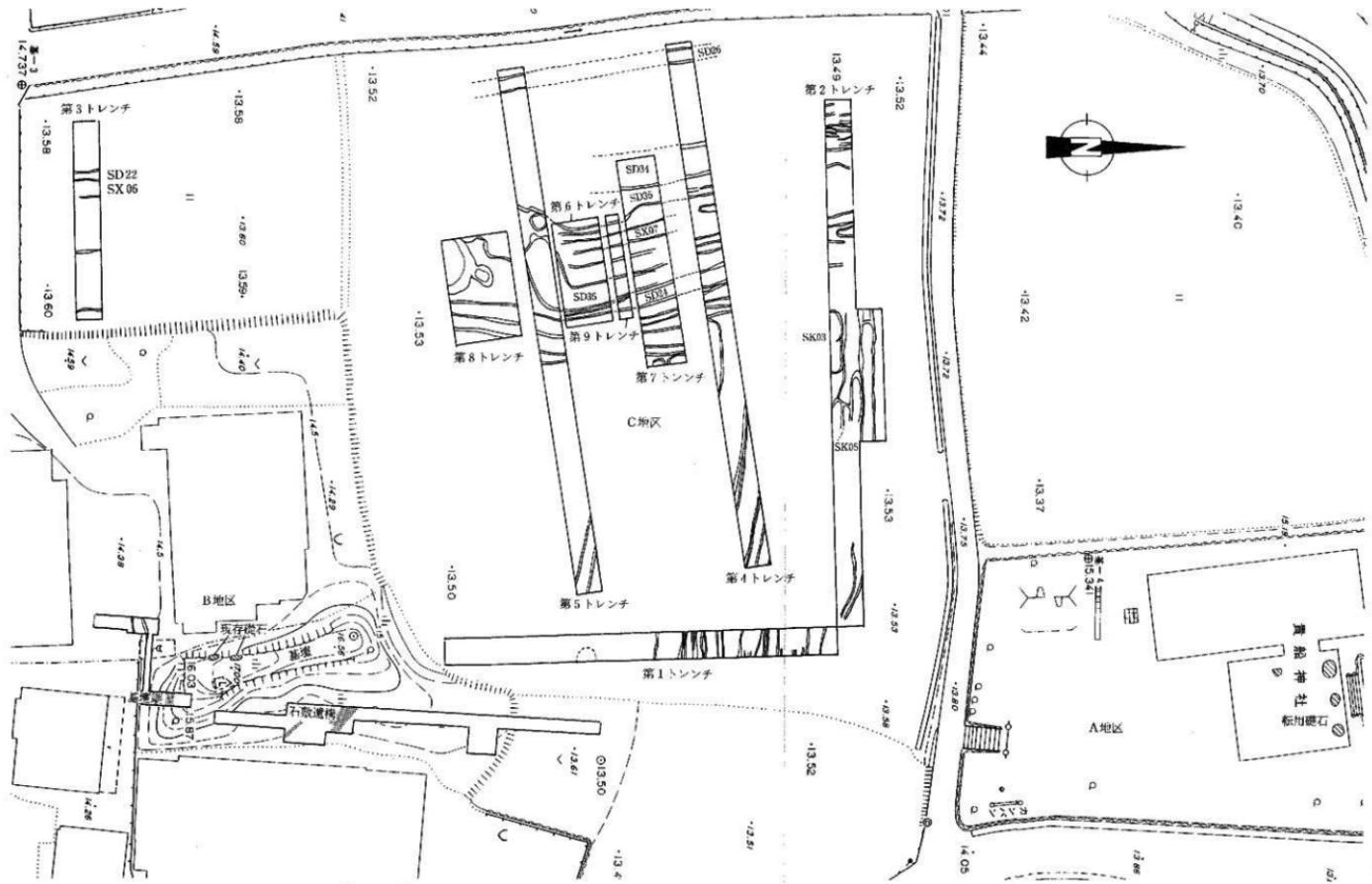


図2 柏原廃寺周辺地形図 ($S = \frac{1}{300}$)

るが、北側では全くみられない。第4トレーニングで西側から東側へ向けて甚大の疊が流れ込んだ状態がみられる程度である。さらにこれと関連してSD 35の西側2.4mを併行して走るSX 07がある。SX 07はV層(砂質土)上にローム状の土を叩きしめたと考えられ、巾1m程度、現状で厚さ3cm程度を確認できる。第6トレーニングから第7トレーニングにかけ7m程度の延長がみられSD 35、24との関連に興味がもたれる。

SD 26は第4、第5トレーニング西端で確認された。現状で巾1.2m程度、深さ0.1m程度である。ほぼ磁北方向に南北に直線的に認められており、前年度確認された第3トレーニングSD 22との関係が注目されるが、SD 22はSD 26に対し東側に約1mほど振れている。また前年に第3トレーニングで注目された版築類似の遺構(SX 06)に対比できるものは確認できなかった。したがって、これをもって寺域西限を示す遺構とするには現時点では慎重にならざるおえない。

この他、第5トレーニングから第4トレーニングにかけてみられたSD 33、34についてみてみたい。このSD 33、34の特徴は昨年の調査では認められない含土で構成される点にある。昨年の調査で遺構の含土として認められたのはIV層とした暗茶褐色土で、かなり固くしまった粘質の強い土層である。これに対し、SD 33、34では明らかに一括で埋められた状況がみられる。各々、含土の状況は相違しており、SD 33では前述のIV層類似層と、灰色の粘質土がブロック状に入り混り、一部ではブロック相互に隙間がみられる。SD 34では同じくIV層類似層がベースとなり、これに灰色の粘土小ブロックが若干混った状況をみせ、SD 34が33を切って掘り込まれている。さらにSD 33、34ともに含土中に若干の古瓦、土器等を含む。こうした状態が何を示すかは慎重に論じられなければならないが、少なくとも本調査区の中央部付近が、大巾に何らかの形で整地されていることを示していることは確かであろう。

2. 遺 墓 物

今回の調査でも昨年同様に多量の古瓦が検出された。特にSD 35で集中的に検出されており、パンケース即箱釋の総量のうち40箱程を占める。そのほとんどは半瓦であり、これに軒丸、軒平瓦、丸瓦、質斗瓦などが加わる。

軒丸瓦は從来より検出されている3タイプ以外になく、相原庵寺の軒丸瓦は全てこの3タイプにより代表されることとは間違いないようである。内区の蓮子も全て1+6で、外区に一重圓を有し、弁数が8葉である点でも全て共通している。

軒平瓦も同様に重孤文一種類のみである。半瓦に額部のみを貼りだし、軒先にあたる部分はその後面を利用し、笠で垂露文を施している。断面はなだらかなカーブを描き、ヘラ仕上げが行なわれている。尚、凸面に叩きを施す例も知られており(第一次調査で検出)注目される。

平瓦については今までの調査で3類8群の分類をしている。今回の調査ではA類(凸面に格子叩きを有するもの)で從来の4群に加えて、新たに粗大な格子叩きを行なう1群が認められた。これは一見してかなり異質な感じを受けるもので、格子目は $1.5 \times 2\text{cm}$ の長方形を基準とし、本溝跡でみられる平均的な格子目($1 \times 1\text{cm}$ 程度の方形)に対して、かなり粗大化している。また、焼成についてもかなり軟質であり、表面的にはいぶして焼成された様な感をうける。こうした資料が相原庵寺の造営時の時間帯を示すものや、また存続年代の巾を示すものや現時点では判断しかねる。

丸瓦は行基式と玉縁式が存在する。量的には行基式が圧倒的に多く、玉縁式は極めて少ない。

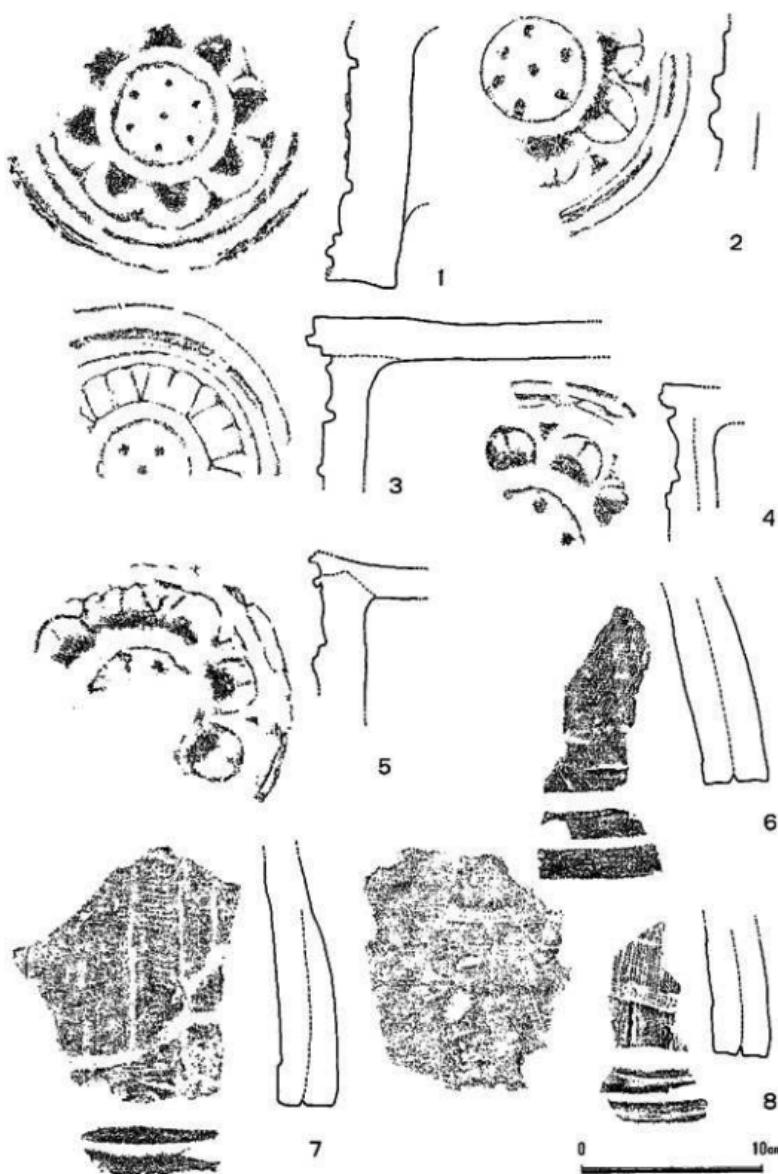


図3 C地区出土 軒丸・軒平瓦実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

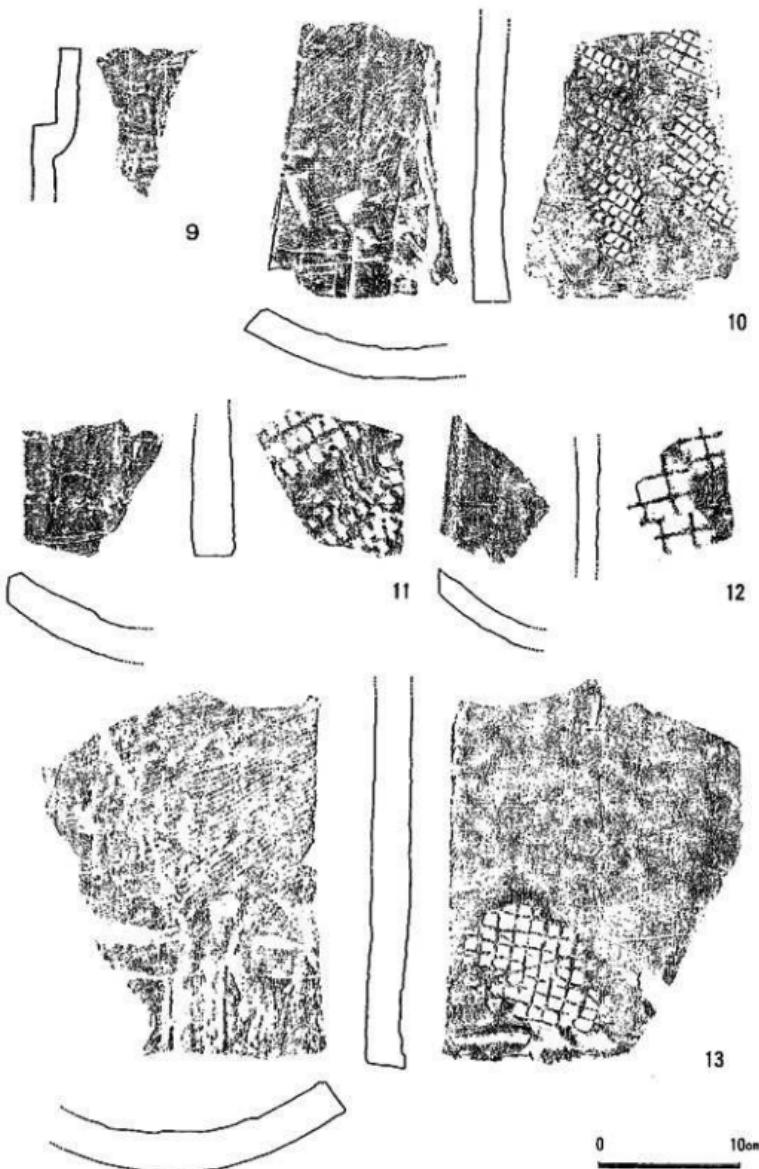


図4 C地区出土 丸瓦・平瓦実測図 ($S = \frac{1}{4}$)

第3章 まとめ

相原廃寺の範囲確認調査も今回で第3次の調査を終了した。相原廃寺の発見から本調査に至る経緯については別稿に詳しいのでここでは触れないが、従来推定されていた主要伽藍部分についてはほぼ全域にわたり調査を実施した。その結果、問題点も指摘されつつ一定の成果も得られていることから、ここで中間のまとめを行ない併せて今後の課題を示しておきたい。

A 地区

現在貞船神社の境内地となっており、神社の石垣に6個、境内に4個の礎石が認められる。石垣内の礎石については明らかに後世の転用であるが、境内地の礎石については一概的な配置がなされており、確認調査を実施した。その結果、この礎石についても後世の社殿建築時の転用であることが明らかとなった。また、周辺より一段高い地形についてはもともとの自然地形を利用して境内地を造成したことが確認され、こうした微高地が存在していたとすれば、寺域北側は結果としてこれより北側には延びないととの査証となった。

B 地区

相原廃寺で唯一明確な遺構である基壇跡を中心とする地区で、ほとんどは宅地である。基壇についてはその版築の状況、および南側の基壇端と思われる乱石積基壇の痕跡が認められている。また、残存基壇東側では真北方向（伽藍主軸推定方向）に対し斜めに走る石敷遺構が確認されており、時期的な問題は残るものと注目される。

C 地区

現在は水田として利用されるおり、A・B地区の中間に位置する。従来は講堂跡と推定されており、その確認の意味で調査区を設定した。地形的にはA・B地区に対して一段低く、比高差は約1m、B地区残存基壇頂部からは2m近く低くなっている。地元ではA地区の神社壇造成に際し、水田部分は地下げされたと伝えられており、事実その痕跡もあるが、どの程度の規模かは不明である。調査の結果、建物に伴う明確な遺構は検出されなかったが、溝状遺構を中心に瓦礫などが調査区中央部に集中して確認された。また、夥しい量の瓦がこれに伴い検出されており、地形の削平は認められるものの何かしらの建物の存在を連想させる。但し、調査区中央付近はかなりの整地（時期不明）が行なわれており、併せて溝状遺構の中には明らかに中・近世の遺物を含むものもあることから、現時点では慎重にならざるをえない。

以上の調査結果をふまえ、今後の調査の課題をまとめると①B地区残存基壇について基壇端、石敷遺構の範囲確認と、北側基壇端の確認、②C地区で認められた西側寺域を示すとみられるSD 26に基づく東側の寺域施設の確認、③B地区における基壇以外の遺構の確認、が必要となる。このため来年度以降はさらに調査対象地区を東および南側に拡大して調査を実施したい。

注1 栗橋憲光「相原廃寺I」 中津市教育委員会 1989

注2 賀川光大「豊前中津市相原廃寺調査報告」 中津市教育委員会 1955

注3 注2と同じ

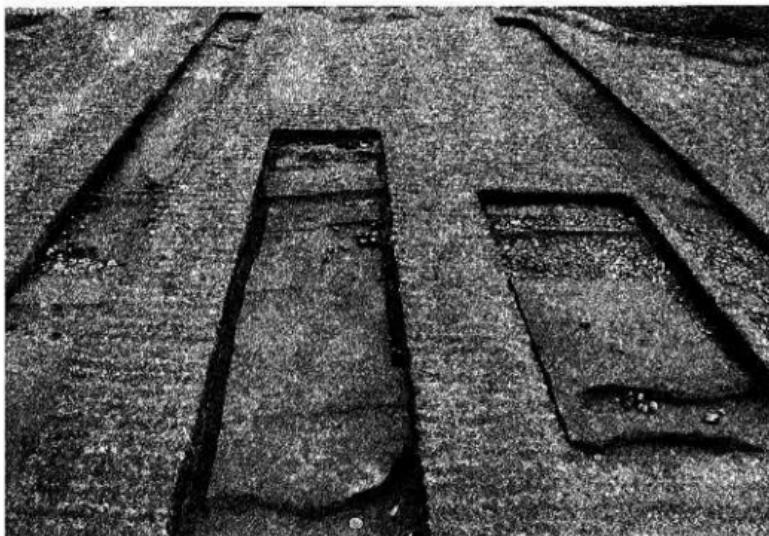


1) C地区全景 調査前（北側より）



2) C地区全景 調査状況（西側より）

図版2

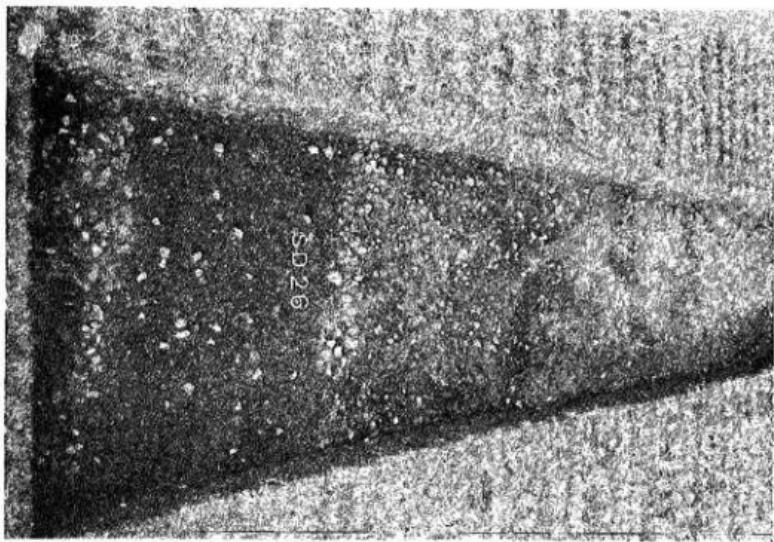


1) C地区第4～第7トレンチ調査状況（西側より）

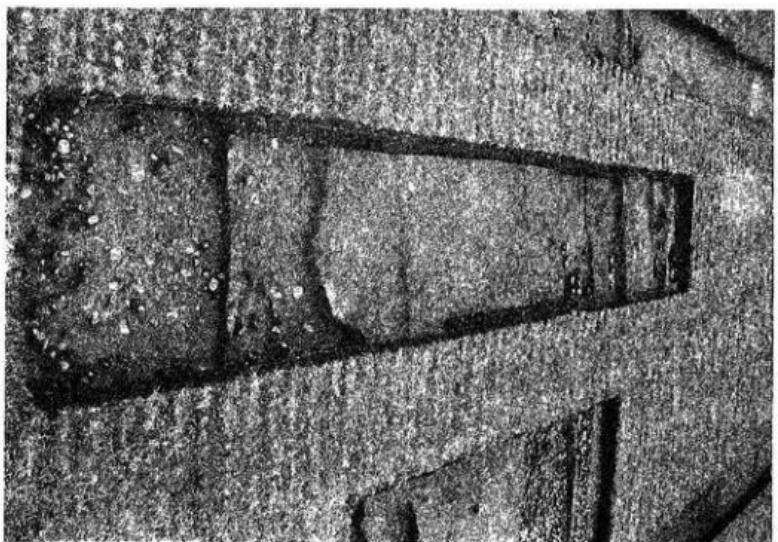


2) C地区 SD24、SD35完掘状況（西側より）

図版3



1) C 地区 第4トレンチ SD26検出状況(西側より)



2) C 地区 第7トレンチ完掘状況(西側より)

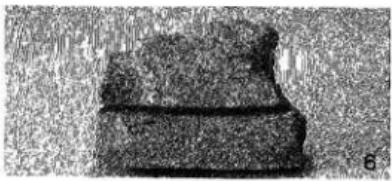
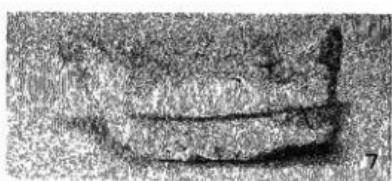
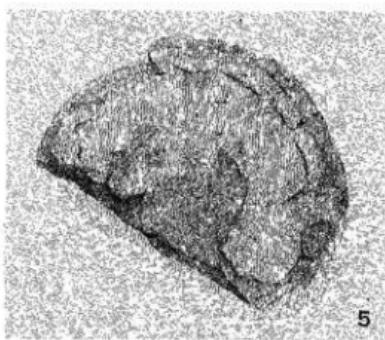
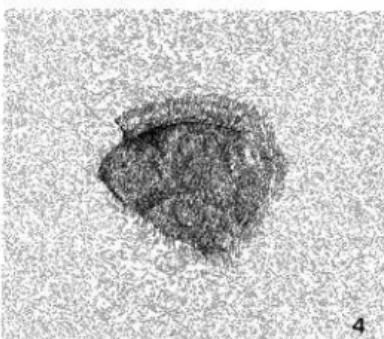
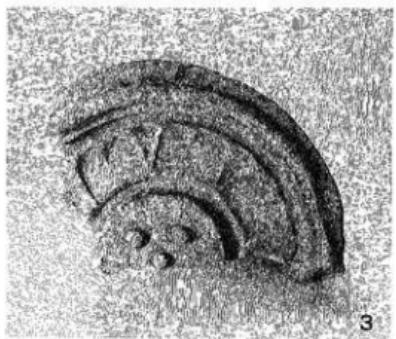
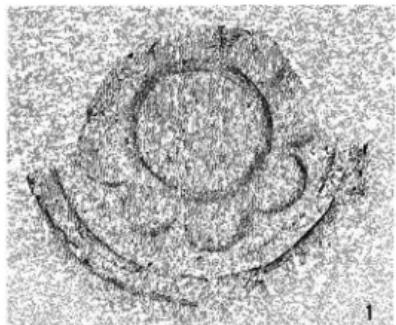
図版4



1) C地区 第6トレンチ SD24軒丸瓦検出状況



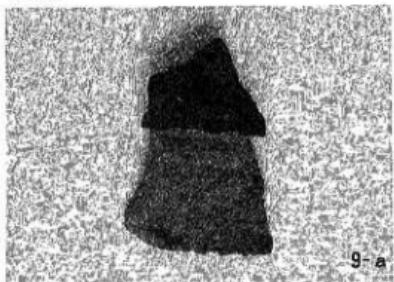
2) C地区 第6トレンチ SD35軒丸瓦検出状況



C地区出土軒丸、軒平瓦

軒丸瓦 1 C類
2,4,5 A類
3 B類 軒平瓦 6,7

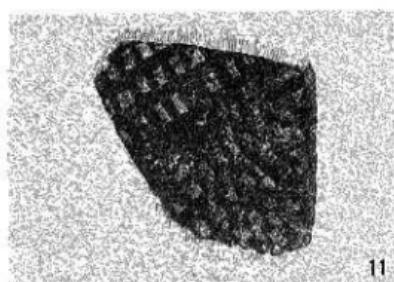
図版6



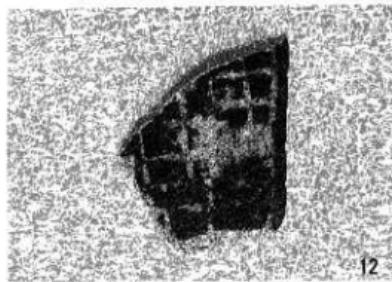
9-a



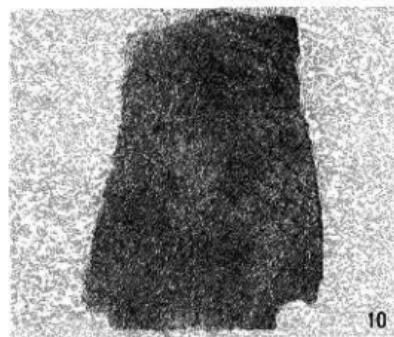
9-b



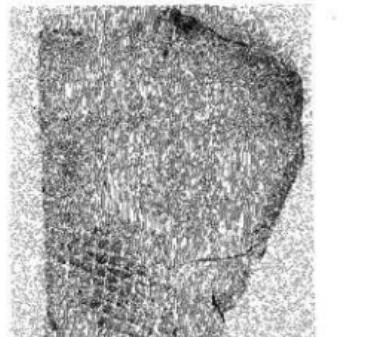
11



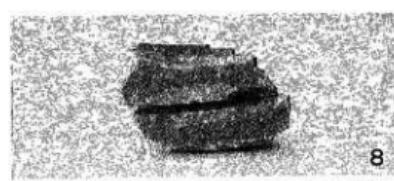
12



10



13



8

- 8 軒平瓦
- 9 丸瓦(下締)
- 10 平瓦(A-1類)
- 11 " (")
- 12 " (A-5類)
- 13 " (A-2類)

C地区出土軒平瓦、丸瓦、平瓦

相原庵寺Ⅲ

中津市文化財調査報告 第10集

1991年3月30日

発行 中津市教育委員会

印刷 川原田印刷社